

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2007-20404

(P2007-20404A)

(43) 公開日 平成19年2月1日(2007.2.1)

(51) Int. Cl. F I テーマコード (参考)
 AO1K 61/00 (2006.01) AO1K 61/00 G 2B104

審査請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 3 頁)

(21) 出願番号	特願2005-202540 (P2005-202540)	(71) 出願人	596041526 西村 公一 香川県仲多度郡琴平町697
(22) 出願日	平成17年7月12日 (2005.7.12)	(71) 出願人	505264440 李 度衡 大韓民国ソウル特別市瑞草区良才洞143-17
		(74) 代理人	100075731 弁理士 大浜 博
		(72) 発明者	西村 公一 香川県仲多度郡琴平町697
		(72) 発明者	李 度衡 大韓民国ソウル特別市瑞草区良才洞143-17
		Fターム(参考)	2B104 AA24 CA01 DA01

(54) 【発明の名称】 真珠の養殖方法およびこの養殖方法により養殖された養殖真珠

(57) 【要約】

【課題】 耐酸性に優れ且つ表面硬度の高い真珠を養殖段階で得られるようにする。

【解決手段】 所定濃度の弗素を含む養殖槽内において、体内に核を入れた二枚貝を養殖することにより、前記二枚貝の体内に弗化カルシウムを含んだ真珠を養殖するようにして、二枚貝を起源とする弗化カルシウムを含んだ真珠（耐酸性が高く且つ表面硬度も高い養殖真珠）が得られるようにしている。

【選択図】 なし

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

所定濃度の弗素を含む養殖槽内において、体内に核を入れた二枚貝を養殖することにより、前記二枚貝の体内に弗化カルシウムを含んだ真珠を養殖することを特徴とする真珠の養殖方法。

【請求項 2】

前記養殖槽における弗素の濃度を 5 p p m 前後に調整したことを特徴とする請求項 1 記載の真珠の養殖方法。

【請求項 3】

請求項 1 および 2 のいずれか一項記載の真珠の養殖方法により養殖された養殖真珠。

10

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本願発明は、耐酸性を有する養殖真珠を得る真珠の養殖方法およびこの養殖方法により養殖された養殖真珠に関するものである。

【背景技術】

【0002】

従来から知られている真珠の養殖方法としては、ドブ貝の貝殻から作られた小真円形状の核をアコヤ貝の体内に入れ、このアコヤ貝を海中において養殖することにより、アコヤ貝の体内で病的現象を起こさせ、核を取り囲む真珠層形成分泌物の主成分である炭酸カルシウムと副成分の約 5 % に当たるコンキオリンと呼ばれる一種の蛋白質と水とで形成される輝きと厚さをもつ養殖真珠を得る方法がある。

20

【0003】

なお、カルシウムを主成分とする有機宝石（例えば、真珠）を、弗化ナトリウムを含む中性もしくは弱酸性水溶液からなる浸漬液中に浸漬し、常温より高い所定温度に加熱しつつ所定時間放置することにより前記有機宝石の表面に弗化カルシウムを主成分とする保護層を形成し、耐酸性が高く且つ表面硬度も高い有機宝石を得る方法が提案されている（特許文献 1 参照）が、この方法の場合、出来上がった有機宝石に対する処理であり、養殖段階において耐酸性が高く且つ表面硬度も高い真珠を得る方法については、鋭意調査したが、見つけることができなかった。

30

【0004】

【特許文献 1】特許第 2 8 6 8 7 3 号公報。

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0005】

ところが、上記のような養殖方法で得られた養殖真珠の場合、炭酸カルシウムを主成分としているため、耐酸性が低く且つ表面硬度も低いところから、使用中に光沢を失ったり、傷が付いたりすることが多く、長期間に亘って装飾性を保持することが難しいという問題があった。

【0006】

本願発明は、上記の点に鑑みてなされたもので、耐酸性に優れ且つ表面硬度の高い真珠を養殖段階で得られるようにすることを目的とするものである。

40

【課題を解決するための手段】

【0007】

本願発明では、上記課題を解決するための第 1 の方法として、所定濃度の弗素を含む養殖槽内において、体内に核を入れた二枚貝を養殖することにより、前記二枚貝の体内に弗化カルシウムを含んだ真珠を養殖するようにしている。

【0008】

上記のような方法としたことにより、二枚貝を起源とする弗化カルシウムを含んだ真珠が得られた。このようにして得られた養殖真珠は、耐酸性が高く且つ表面硬度も高いもの

50

となる。

【0009】

本願発明では、さらに、上記課題を解決するための第2の方法として、上記第1の方法を備えた真珠の養殖方法において、前記養殖槽における弗素の濃度を5ppm前後に調整することもでき、そのようにした場合、最適な養殖環境のもとに、耐酸性が高く且つ表面硬度も高い養殖真珠が得られる。なお、自然の海水には約3ppmの弗素が含まれているが、この濃度で養殖を行ったとしても、弗化カルシウムを含んだものとならない。しかしながら、弗素濃度を5ppm程度まで上昇させると、弗化カルシウムを形成することができる。また、弗素濃度が7ppm以上となると、真珠の表面に白い斑条が現れ、装飾品としての価値がなくなる。また、弗素濃度が10ppm以上となると二枚貝が死亡してしまい、養殖ができなくなる。

10

【発明の効果】

【0010】

本願発明の第1の方法によれば、所定濃度の弗素を含む養殖槽内において、体内に核を入れた二枚貝を養殖することにより、前記二枚貝の体内に弗化カルシウムを含んだ真珠を養殖するようにして、二枚貝を起源とする弗化カルシウムを含んだ真珠が得られるようにしたので、耐酸性が高く且つ表面硬度も高い養殖真珠が得られることとなり、長期間に亘って装飾性を保持できる養殖真珠が得られるという効果がある。

【0011】

本願発明の第2の方法におけるように、上記第1の方法を備えた真珠の養殖方法において、前記養殖槽における弗素の濃度を5ppm前後に調整することもでき、そのようにした場合、最適な養殖環境のもとに、耐酸性が高く且つ表面硬度も高い養殖真珠が得られる。

20

【発明を実施するための最良の形態】

【0012】

所定の大きさの養殖槽内に海水を入れ、その中に弗化ナトリウムを水溶液にして加え、弗素の濃度を5ppm前後に調整する。この養殖槽内に、体内に核（例えば、ドフ貝の貝殻より作られた小真円形状の核）を入れた二枚貝（例えば、アコヤ貝）を入れて養殖を行う。すると、約6カ月程度で貝を起源とする弗化カルシウムを含んだ養殖真珠が得られた。このようにして得られた養殖真珠は、耐酸性が高く且つ表面硬度も高いものとなり、長期間に亘って装飾性を保持できる。なお、自然の海水には約3ppmの弗素が含まれているが、この濃度で養殖を行ったとしても、弗化カルシウムを含んだものとならない。しかしながら、弗素濃度を5ppm程度まで上昇させると、弗化カルシウムを形成することができる。また、弗素濃度が7ppm以上となると、真珠の表面に白い斑条が現れ、装飾品としての価値がなくなる。また、弗素濃度が10ppm以上となると二枚貝が死亡してしまい、養殖ができなくなる。

30